

日文Webサイトのご案内

日文 Web サイトでは、日々の指導や資料制作に役だつさまざまな情報を積極的に発信しています。デジタルマーク対応コンテンツ（本書 P.27 参照）を見ることもできます。

～掲載内容～

- 内容解説資料（電子ブック）
- 教科書検討の観点から見た内容の特色
- 編修趣意書
- 教科書デジタルコンテンツ
- 2019 年移行措置関連資料、副読本作成資料
- 社会科 Q&A など
- 内容解説動画
- 社会科 NAVI

スマートフォン
対応!



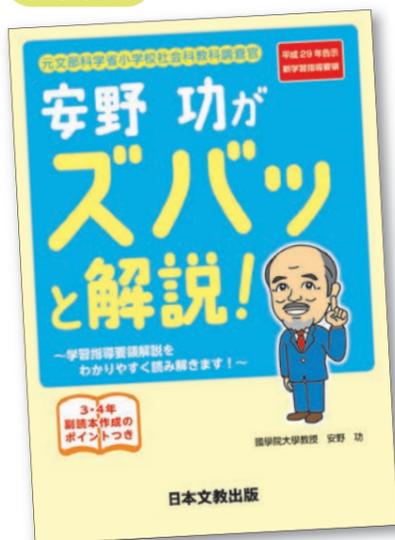
今すぐ
日文Webサイトに
アクセスしてみよう!

日文 小社 2020

検索

<https://www.nichibun-g.co.jp/2020/>

小学社会



平成29年告示 新学習指導要領
元文部科学省小学校社会科教科調査官

好評発売中

安野 功がズバツと解説!

～学習指導要領解説をわかりやすく読み解きます!～

本書の主な内容

- 第1章 新しい時代の社会科と教科書の方向性
- 第2章 新学習指導要領を読み解く“五つのキーワード”
- 第3章 新・旧の対比で見えてくる“社会科授業づくりの新しい方向性”
- 第4章 新学習指導要領の実践課題Q&A

著者 國學院大學教授 安野 功

定価 1,728円 (本体1,600円+税8%)
B5判 112頁

お求めは、最寄りの書店でお願い致します。

社会科 NAVI Vol.22

2020年度版『小学社会』
教科書特集号

日文教育資料 [小・中学校社会]

令和元年(2019年)5月15日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社

〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL: 06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33456

日本文教出版 株式会社

<http://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18-7F・B
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690

日文教育資料 [小・中学校社会]



歴史学者
磯田道史先生による
『小学社会』の
見どころ掲載

社会科 NAVI

2019
VOL. 22



子どもの豊かな学びをささえる



2020年度版小学校社会科内容資料として扱われます。

2020年度版
『小学社会』
教科書特集号

本資料は、一般社団法人教科書協会
「教科書発行者行動規範」に則り、
配布を許可されているものです。

未来をになう子どもたちへ
日本文教出版

日文の教科書情報
詳しくはWebへ! 日文 検索



- 3 日本文教出版『小学社会』へようこそ
2020年度版『小学社会』の基本方針
- 4 特別インタビュー
歴史学者
磯田道史先生に聞く『小学社会』の見どころ
国際日本文化研究センター准教授
- 6 代表監修者による座談会
新しく生まれ変わる『小学社会』について
名古屋大学名誉教授 的場正美
日本体育大学教授 池野範男
國學院大學教授 安野 功
- 10 教科書見本で解説
新版『小学社会』の特長

わたしの提案

- 18 **3年生** 愛知教育大学准教授 真島聖子
教科書で学習する初めての社会科
- 20 **4年生** 名古屋大学大学院教授 柴田好章
自然災害から人々を守る活動
- 22 **5年生** 広島大学大学院准教授 永田忠道
情報社会に生きるわたしたち
- 24 **6年生** 愛知教育大学教授 土屋武志
教科書で小学校社会科の集大成を
- 26 『小学社会』教師用指導書、
デジタル教科書・教材のご案内

日文Webサイト
2020年度版小学校教科書
『小学社会』のご案内



日本文教出版
『小学社会』へようこそ
新しい教科書ができました!

2020年度版『小学社会』の基本方針

1

自らの生き方を問い続ける
子どもを育てます

2

みんなとともに考える
子どもを育てます

3

未来社会をたくましく生きる
子どもを育てます



各学年1巻(合本)構成になりました!

軽量化を実現。現行本に比べ、軽くなりました。
学年の見通しがもてるとともに、ふり返り活動も充実させることができます。
カリキュラム・マネジメントへの柔軟な対応が可能となります。



歴史学者

磯田道史先生に聞く

『小学社会』

の

見どころ

—「歴史は靴」。私は子どもたちに
安全な靴をつくりたい—

『小学社会』の監修者を 引き受けていただいたわけを お聞かせください。

特に今回は、6年歴史単元の監修をしました。私が関わろうと思ったのは、子どもが歴史にわくわくする教科書をつくりたいと思ったからです。

日本文教出版の教科書がこれまで大切にしてきた問題解決的な学習は、私もとても大事にしたいものです。歴史学習の第一歩は、子どもがまず自分の疑問をもつことです。教科書の各見開きにある、「なぜ」「どうして」という子どもの素朴な問いです。歴史はどうしても暗記ものになってしまいがちです。そうしないためには、子どもたちが、自分たちの問題として考えることです。

素朴な問いを追究していくには、調べるといった活動が必要です。それには、体験学習も大事です。例えば、黒曜石を手に入れるためにはどうしたらいいか考えようとか、それで石器をつくりたいという学習をしてほしい。私は、子どものころに黒曜石が見たくて、親に頼んで島根県の隠岐の島に連れて行ってもらいました。

磯田先生が歴史に興味をもった きっかけを教えてください。

子どものころから、歴史少年、考古学少年でした。私が生まれたのは、古代の吉備王国が栄えた

岡山県です。通っていた小学校は、古墳を削ってつくられていました。私の家は、弥生時代の遺跡の上であって、庭から本物の弥生土器が出てきました。その手触りにわくわくしました。土器を見つけたとき、きつここの土でつくられたわけだから、実際につくってみようとしたんです。当時と同じ高い温度で焼いて再現しました。

遺跡にもよく足を運びました。自分の目で見ると、とても大事ですから。日常生活でいえば、食事のことも歴史を学ぶきっかけになりますね。自分たちの祖先は何を食べていたのか、三食食べるようになったのはいつからか、とかね。

すべてのものに歴史があります。その子どもが関心のあるものから先生が語ればいい。相撲が好きの子、ファッションに興味のある子、お菓子が好きな子どもに、その歴史を先生が調べて、子どもの興味・関心に答えてあげてほしい。「平清盛の時代にはどんなお菓子を食べていたのかな。」とか。「後の時代には、砂糖を輸入して、今のお菓みに近いものが出てくる。」など、教科書をヒントに子ども一人一人と向き合ってもらいたい。

監修していただいた『小学社会』の 見どころを教えてください。

大きくは二つあります。一つ目は、教科書に掲載している図版は、子どもが疑問をもてるものに改善されました。例えば、6年のP.126にある

「安土城あとから出土したかわら」の写真をみてください。これは、瓦に金箔がはられているんです。織田信長は、誰も見たことがないきらびやかな城を建てました。信長の独創性はこれを見ただけでもわかります。我々が採用した図版には必ず裏話があります。インターネットなどを使ってぜひ調べてみてください。

もう一つ大きな見どころとしては、時代ごとに、当時の人々の暮らしに注目した導入にしたところ。なぜ、暮らしに着目したかという、「歴史は靴」ということなんです。人間は靴を履いていないと安全に歩けないでしょう。歴史がわかっていると、例えば過去の災害の歴史がわかるし、将来、仕事を失わずに生きていくには、どういう商売をしたらいいのかがわかる。歴史を知らずに世の中を歩くのは、裸足で歩くようなものです。子どもたちに履いてほしい安全な靴をつくるのが、わたしたちの仕事です。

数字を重視することも心がけました。例えば、18世紀の江戸の人口と同じ時代のロンドンやパリの人口を比べています（6年P.151）。数字にすると比べることができる。その際、「正しく比べる」という発想も教えてほしいのです。現代は、自分の国で起きていることを世界と比べる時代になっています。

比べるということといえば、教科書の前後のページを比較しながら教えてほしいですね。当時の建築物について、古代の古墳から法隆寺の見上げる高い塔が変わっていく。実はこの技術で中世の城がつけられているんです。また、土器と瓦を焼く技術は違う。瓦は水をはじかなければならないので、窯を使って高温で焼かなければならない。そんな理化学的な視点でも教えてほしいと思います。日本を担う未来の技術者を育てるという意味でも、そういう視点は大事です。

社会科を専門としていない先生でも、 それぞれの視点で歴史に アプローチすればよいということですか。

小学校の先生は、その専門に関わらず担任をされていますね。理科の先生なら理学的な視点で歴史を教えればいいのです。美術の先生なら、装飾古墳にうずまき模様がたくさん出てくることの意味とか、縄文人と弥生人がつくった土器のデザイ

ンの違いとか、宇治の平等院鳳凰堂は、左右対称であるとか、子どもにどんどん話せばいい。形に着目してもいい。前方後円墳の形とかね。時代ごとに順番に教えるのではなく、「今日は、教科書のなかから特徴ある形を比較してみよう。」という使い方をしてもらいたい。先生が得意な分野でテーマをつくれればいいのです。そういうときは、教科書は図録として使えます。

最後に、この教科書でどのような 子どもを育てたいですか。

この教科書を使う子どもたちが生きる社会は、そのしくみが今までとは大きく変わり、まったく新しい時代です。子どもたちは、人類史上の大変革の入口に立っています。人類はこれまで狩猟・採集時代の大変革、農業から工業化がはじまるときの大変革を経験してきました。現代社会は、農耕や工業の開始と並んで、100年に一度しか生じない大変革のときです。大きなところでは、人工知能、ネットワーク化したコンピューターの発達がありますね。これまでにない発想で物をつくらなと意味のない時代です。みんなで同じものを覚えるという時代は終わりました。基礎教養をふまえても、自分で課題をつくり、誰ももっていない発想で行動すること。それが求められる時代です。この教科書で、先生も子どももたくさん疑問をもって、楽しみながら学習してほしいと思います。教科書を、世界へ広がる扉や窓のようなものと考えてほしいですね。



磯田道史 (いそだ みちふみ)
歴史学者。国際日本文化研究センター准教授。茨城大学、静岡文化芸術大学などを経て、2016年から現職。著書に『武士の家計簿』（新潮新書、第2回新潮ドキュメント賞）や『天災から日本史を読みなおす』（中公新書、第63回日本エッセイスト・クラブ賞）など多数。NHK大河ドラマの時代考証ほか、テレビや新聞などで、歴史をおもしろく、分かりやすく読み解く手法は人気。2020年度版から、文部科学省検定教科書『小学社会』（日本文教出版）の監修者。

新しく生まれ変わる『小学社会』について



名古屋大学名誉教授
的場正美
専門は教育方法学。特に、ドイツの政治教育、公民教育を研究対象とする。1990年から『小学社会』監修者。

日本体育大学教授
池野範男
専門は教育学（社会科教育）。最近、シティズンシップ教育に関する研究を主におこなう。1998年から『小学社会』監修者。

國學院大学教授
安野 功
小学校教員を経て、2000年から文部科学省初等中等教育局教科調査官（小学校社会科）を務める。2009年退官。2015年から『小学社会』監修者。

これからの時代に求められる 資質・能力を育む学習を

安野：日本文教出版の『小学社会』は新学習指導要領の趣旨やねらいに基づいて、これまで以上に魅力的な教科書に生まれ変わりました。そこで今回は、代表監修者である3人が集まって、新しい教科書づくりについての思いを語ってみたいと思います。

池野：今回、私は学習指導要領改訂に関わりましたので、まずは大きなポイントを説明したいと思います。社会科の学びが、学校のなかで完結するのではなく、学校と社会が結びつくという考えを重視して、新たな学習指導要領は考えられてい

ます。これまで内容中心だった学校教育が、資質・能力を育むことを重点化しているのです。これからの未来を担う子どもたちへ、学校で習ったことが社会でも生き続け、大きく発展できるようにという願いが込められています。新しい『小学社会』は、問題解決力、社会的事象の見方・考え方、資質・能力を培えるようにと、教科書記述の見直しをおこないました。

的場：平成29年度の中央教育審議会では、日本の「少子高齢化」「グローバル化」「技術革新」「人工知能」に注視するなど、私たちを取り巻く環境の構図が目まぐるしく変わってきています。予測困難な未来社会を生きていくために、より一層の問題解決力が求められてきていますね。

資質・能力を育むというのは、小学校社会科だけでなく、他教科も含め、全体で培うものだと思います。もともと社会科は総合的な性格の教科ではあるのですが、それぞれの教科の専門性と同様に、社会科にも専門性があります。教師も子どもも、それらの教科の資質・能力を総合して自己を形成していくのが理想です。

池野：問題解決学習は、小学校教育では、中心的な考え方だと思います。もっとも大事なのは、子どもたちが自分で考えられるようになること。そのためには、まず問題が出てくる、考えて見る、解決策を進める、といった授業が必要になります。物事に対する見方・考え方を、先生にも子どもたちにも教えることのできる教科書が、現場で生きてくるのではないのでしょうか。学習指導要領でいえば、考察を通して構想していく。さらに発展させて、新しい社会を描けるようになっていくというところにあたります。その理想を実現しようとしているのが、『小学社会』のめざしている内容なのです。

これまで『小学社会』では、見方・考え方について、いち早く取り入れてきました。系統的な知識習得型の学びだけではなく、問題解決学習に率先して力を注いできた教科書だと思います。そして、今回の学習指導要領では、社会科以外の各教科でも、新たに見方・考え方を取り入れるようになりましたね。『小学社会』の考え方に、時代が追いついてきたという感じですね。

的場：問題解決学習のおもしろさは、一つの問題から、また新しい問題が出てきて、自分たちの知識や概念をつくり変えていくところにあります。この学びが何層にも重なることで、より深い学びになっていくのだと思います。主体的・対話的で深い学びというのは、何を学ぶかだけではなく、どのように学ぶかも重視して授業を進めることが大きなポイントになると考えています。

池野：授業の進め方としては、一つのテーマに対して、いくつかの問題が出てくるのが大事ですね。例えば、ごみ問題があって、どのように問題

解決すべきかを、学習の経過として捉えられるようになればいいと思います。これらは家庭の事情、自治体の事情など、自分を取り巻く環境によって変わります。答えは一つではありません。子どもたちが状況を調べた結果から、自分なりの答えを見つけるのが理想です。

安野：その面では、『小学社会』の紙面をつくる時に苦労しましたね。どのようにして一人一人の学びを対話的にするか、学習問題に対する一人一人の考えを他とともに深めていくか。このように学び手の側に立つ意識や思考の流れを大切にしたら、子ども主体の協働的な問題解決をめざしました。

新しい教科書を学校現場で どのように活用するか

安野：『小学社会』では、問題解決のプロセスが見える教科書づくりにこだわってきましたが、先生方が現場でこの教科書を使うときには、どのようにするのが理想だと思いますか。

池野：これまで『小学社会』で設定してきたよう



安野 功

知識の習得だけではなく、「どのように学ぶか」を重視する

に、メインとなる学習者を登場させて問題を展開しています。一人の子どもによる疑問や意見を提示することにより、自分ならどう思うかを意識するようなしかけになっているのです。

これは、子どもたちがみんなで考えたり、調べたりという学習経験につなげやすいのではないのでしょうか。学習の見通しが自然につくりやすいですね。そこから、見方・考え方を手がかりとして、どんなものをどういうふうに調べたいのか。調べるだけでなく、まとめ方や取り扱い方をどうするのか。グループで話し合い、比較することで、自分にとって一歩進んだ答えを見つめられるようになるかが重要です。

安野：子どもたちが、知っているつもりでも、実はよくわからないといった「素朴な問い」に出会い、事実や証拠を集める。それをもとに「深まった問い」を見つけ、社会のしくみや人々の働き、その意味をみんなで考える。その過程で事実を見つめる力や考察する力を身につける。そんな素朴な問いが深い学びへと発展していく問題解決をめざしたいのですが時数が足りない。この悩みの解

決には単元や教科間のつながりを活用することが不可欠です。

例えば、3年生の最後に、市の様子の移り変わりを扱う単元があります。それとの関連を見通したうえで、最初の市の様子の学習を展開する。その際、生活科で自分たちが町を歩いたことを想起させれば、一つの学習の縦のつながりができる。さらに学年を超え、中学校までも見通した縦のつながりや、他教科との横のつながりなど、カリキュラム・マネジメントに活用できる教科書を目標として作成しています。

指導内容が増えているのに時間数は変わらないという現場の悩みを解決するために、学習をより効率よく展開できるよう工夫しているのです。

池野：『小学社会』については、問題解決学習を三段階で、ステップアップできるように構成しています。第一段階では、問題を見つけることによって、どういうふうにしたらいいか。第二段階では、それを一種の手がかりにしながら、解決策を模索しながら、では、どういうふうに調べていったらいいのか。第三段階では、その中で一定の知識と能力と技能を身につけることによって、どのように達成していくか。見方・考え方を通して、どういう目的地や目標まで到達すれば、その単元が子どもたちにとっていいのか。子どもたちがそこからもっと新しい問題を見つけてくれれば、次の問題につながります。初めに手がかりにした見方・考え方を、探究的に発展させることになるのです。どの学年でもいえることですが、すべての単元に対して、同じように重点的にやってしまうと、時間数が足りなくなります。『小学社会』では、1学期での学習は丁寧にし、2学期、3学期では1学期の学びを活用して学習できる構成にしています。調査やまとめといった活動は、後半の単元にいくほど、子どもたちが既習経験を生かして自分でやれるような内容になっています。紙面を通してこれらの工夫を先生方に理解していただけたらうれしいですね。

的場：5年の食料生産と工業生産のところを、こ

れまでは、個別にふり返っていましたが、今回は食料生産や工業生産全体として考える構成にしています。そうしないと全体を見渡せない。これからは、思い切ってやらないといけないですね。その発想のものが、今回の教科書にあります。例えば、途中で内容を縮小して進めても、最後にまとめがあるから大丈夫であると。先生方は教科書の流れを進めるだけでも、最低限の学習効果を図っていただけるのです。

安野：知識の定着を主眼にすると、単元を小さく切った方が指導しやすいですね。でも、資質・能力を育てるためには、食料確保など一つのテーマについて、いろいろな角度や立場から多角的に考えるということを大切にしていきたいですからね。

しかし、このような学びを進めていくにあたっては、学年が上にいくほど、どうしても教科書が厚くなってしまいう課題がありました。小学生が教科書などをランドセルで何冊も持ち歩くことを考えると、今まで以上に重くはできません。そこで自慢したいポイントがあるのですが、新しい『小学社会』は、紙の重さを考慮して、軽量化に成功したのです。ふり返りの学習でも、上下巻が分冊になっている教科書と違って、1冊にすべてがまとまっているという点も、効率的に使えるのではないかと思いますね。

代表監修者から 現場の先生方にメッセージを

的場：教科書は世界に開かれた扉、世界を見る窓だという感覚を、まず先生方にもっていただきたいです。教科書は道具であって、友だちと意見を交流する媒介物のようなものです。みんなで調べたり、資料を探してきたり、問題解決学習を進めたりするために、教科書は考え方の仕組みの提案だと捉えてほしいです。そして、子どもたちが今持っている力を信じて、学級づくりをしてほしいなと思います。問題解決学習の一番大切なところには、子どもの視野に入るとのこと。常にあき

らめずに、問題に対して先生方も自分の言葉で語ってほしいですね。

池野：問題解決学習を踏まえながら、子どもたちが予測困難な未来社会へ立ち向かうための力をつけてほしいですね。社会との関係をもっと緊密にとりながら、社会の問題を自分の問題として捉えるようになれるのが理想です。公民としての資質をはじめ、今の社会科の目標となる主権者としての力をつけていってほしいですね。

安野：今回の『小学社会』は、ひとことで言うと「本気の学び」です。これからの社会科では、個々が自分の意見を持ち、対話で考えを深め合っていく主体性のある学びが求められています。そのために、まず子どもたちの問いを大切にし、できれば先生も子どもと同じ土俵で一緒に考えてほしいですね。そうすると、子どもが同じ一人の人間として社会のさまざまな問題を自分事として本気で考えるようになります。子どもと先生が本気で問題解決に取り組めば、未来社会を切り拓く子どもが育つ、より価値のある社会科の授業が創れるはずですよ。



池野範男



的場正美

子どもと本気で取り組む、問題解決学習を

子どもの問題意識の流れや学習の進め方

が一目でわかる紙面

『小学社会』では、本文を三つの役割で分け、正確に文章が読み取れるようにしました。
また、中心資料が明確な紙面にするとともに、子どもの問題意識を大切に文章構成にすることで、学習がスムーズに進められるようにしました。

中心資料を明確にした紙面

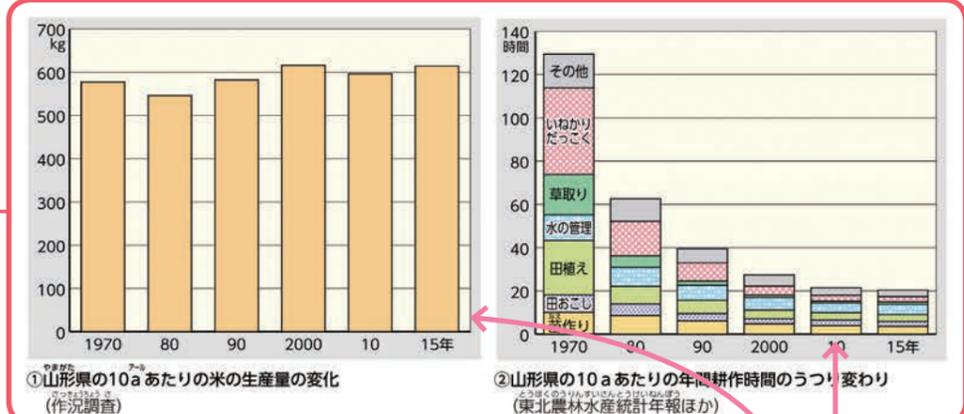
見開きの中心資料が一目でわかる紙面をめざしました。

わたし(たち)の問題

素朴な問いや見開きで中心になる問題を示しています。

○○さんの話

さまざまな立場で社会を支える人の話を取り上げることで、子どもたちが疑問に思ったことに対して実感をもって理解し、解決へ導くように配慮しています。



庄内平野では、どのようにして、米を大量に生産しているのだろう。

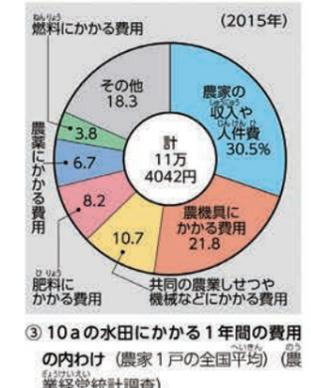
機械化とほ場整備 みおさんたちは、①と②のグラフを見て、読み取ったことを出しました。

米の生産量が多いと、耕作時間が長くなりそうなのに、短くなったのは、どうしてかな。

いねかりやだっこく、田植えなどの作業時間が、年々減っているね。

話し合いて、耕作時間の減少と生産量との関わりが気になり、五十嵐さんに手紙でたずねました。

米農家の五十嵐さんの話
60年ほど前から農作業で農機具を使うようになりました。今では、多くの作業で機械を使うようになり、農作業にかかる時間が短くなりました。しかし、農機具はねだんが高く、燃料代や修理代もかかるため、農家の負担が大きくなっています。そこで、ほかの農家と共同で機械を買い入れたり、収穫した米を共同でかわかしたりして、かかる費用を少なくするようにしている農家もあります。



平成27年版と比べて、さらにわかりやすくなっています!

はるとさんたちは、④の左と右の写真を比べて、なぜ、田の形や大きさをつくりかえているのかきもんに思い、調べました。

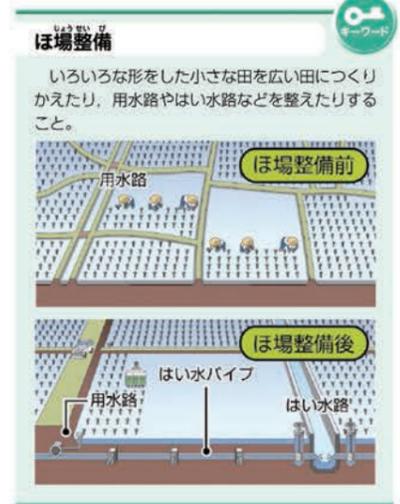
庄内平野では、55年ほど前からほ場整備がおこなわれてきました。ほ場整備をすると、田や農道が広がるので、大型の機械が使いやすくなります。また、用水路やはい水路も整えられるため、川から遠くはなれた場所でも水が十分に使え、水はけもよくなります。

そのあと、機械化やほ場整備で米作りにどんな変化があったのか、話し合いました。

ほ場整備をすると、どの田でも農作業がしやすいし、農機具も使いやすくなるんだね。

農機具を使うことで、農作業の時間を減らすことができたんだね。

④ほ場整備前(左)とほ場整備後(右) (山形県鮭川村) 山形県では、小さい田を30aの広さの長方形の田につくりかえる、ほ場整備が国や県によって進められてきました。最近では、さらに一つの田を1haの広さにする工事も進められています。



ほ場整備と機械化 はるとさんたちは、「山形県庄内平野のようす」の写真(P.54～55)で、田の形が長方形だったことが気になり、調べることにしました。庄内平野では、50年ほど前からほ場整備がおこなわれてきました。ほ場整備をおこなうには、その地域の農家が話し合い、県に申しこみをします。そして、県から示された計画書をもとに、農家どうしの意見がまとまると、工事ははじまります。工事が完りようするには8年ほどかかります。ほ場整備をすると、田も農道も広がるので、大型機械が使いやすくなります。また、用水路やはい水路も整えられるため、川から遠くはなれた場所でも水が豊富に使えようになり、水はけもよくなります。

本文の三つの役割 ポイント1

1 学習活動 (技能をともなう活動)

1では、図版番号を示し、どの図版を読み取り、学習すればよいか、わかるようにしました。また、「わたし(たち)の問題」以外の疑問も示し、子どもの問題意識の流れがつかめるようにしました。

本文の三つの役割 ポイント2

2 友だちの発言 (思考力・判断力・表現力等)

2では、資料の読み取りや話し合いから出た気づきや疑問を示しています。また、気づきには、「!」を、疑問には「?」を示し、一目で発言内容がわかるようにしました。

本文の三つの役割 ポイント3

3 学習内容 (知識の内容)

3では、ほ場整備に関する文の上下に線を引く、他の本文と区別した体裁にしています。

深い学びを実現するために「見方・考え方」を新設

社会的事象をとらえ、考えを深めていくためには、「視点と方法」を働かせることが大切です。そのために『小学社会』では、「見方・考え方コーナー」を新設し、「空間」「時間」「関係」の三つの視点に分けて提示しています。

空間の視点

交通網の広がりに着目

見方・考え方 **空間**

鉄道や道路は、どのように通っていて、どこに多く集まっているのだろう。地図を見て考えてみよう。

④総務省の交通

③総務省の交通

3年 P.23

各地で生産される農産物のちがいを 国土の広がりと気候をふり返って考える

見方・考え方 **空間**

なぜ、各地でさかんに生産される農産物がちがうのだろう。国土の学習で気候や地形に合わせた産業がおこなわれていたことをふり返って予想してみよう。

5年 P.70-71

空襲を受けた都市と 被害の規模との関係を考える

見方・考え方 **空間**

日本全国で空襲がおこなわれているけれど、集中している地域があるね。どのあたりに集中しているのだろう。

6年 P.206

時間の視点

4 市のようにとらしの うつりかわり

見方・考え方 **時間**

今と昔で、どんなところがかわったのだろう。2まいの写真をくらべて、かわったところやかわっていないところに注目して、考えてみよう。

3年 P.124-125

3年 P.124-125

年表で移り変わりに着目

見方・考え方 **時間**

③の年表を見て、どこでどのような変化があったのか、考えてみよう。

4年 P.161

治水工事前後の変化からその影響を考える

見方・考え方 **時間**

治水工事前と治水工事後では、どのような変化があっただろう。治水工事前 → 治水工事後

5年 P.48

関係の視点

店とくらしとの関わりに着目

見方・考え方 **関係**

買い物調べのきっかけと、自分たちの生活は、どうつながっているのだろう。次のようなことに注目して考えてみよう。

日づけ	買い物した店	買った品物	品物のしゅるい	話を聞いたこと(その店で買った品物)
9/14 (月)	スーパーマーケット	野菜、くだもの、魚、たまご、そうざい	食料品	とくに食料品は、スーパーマーケットが買っている
9/15 (火)	コンビニエンスストア 肉屋、文房具屋	アイスクリーム、肉、コロッケ、えんぴつ	食料品、日用品	コロッケが安売りをしている
9/16 (水)	スーパーマーケット パン屋	野菜、魚、とうふ、せんざい、パン	食料品、日用品	
9/17 (木)				
9/18 (金)	駅前のデパート ドラッグストア	野菜、牛にゅう、肉、パン、くすり	食料品、そのほか	会社の帰りに買物をする
9/19 (土)	インターネット	そうじき	電気製品	わりょうではいたつ
9/20 (日)	ショッピングモール ガソリンスタンド	魚、肉、野菜、くだもの、パン、ティッシュペーパー、くつ下、ガソリン	食料品、日用品、いろいろ、そのほか	家族で自動車に乗って、帰りに買物をした。

①れんさんの買い物調べカード

3年 P.68

3年 P.68

多角的な視点から食料生産を考える

見方・考え方 **関係**

わたしたちが食べる食料は、輸出の気候や世界のできごとと、どのような関わりがあるといえるのだろう。いろいろな視点から考えてみよう。

外国の牛が病気になったら... 小麦が輸入できなくなったら...

5年 P.118-119

家庭電化製品のくらしへの影響に着目

見方・考え方 **関係**

家庭電化製品は、わたしたちのくらしにどんなえいきょうをもたらしたのだろう。

6年 P.220

教科書で学習する 初めての社会科

愛知教育大学准教授
真島 聖子



—3年について—

第3学年は、四つの大単元で構成されている。

「わたしたちの住んでいるところ」では、改訂に伴って、市のように調べる活動に重点が置かれ、市役所の位置や他の公共施設との関わりを地図で確認したり、市役所の働きや仕事の内容を手紙で尋ねたりする活動が新たに展開されている。

また、学習のまとめにおいては、宇宙から撮影した写真をもとに県内における市の位置について確認する学習が新たに設定された。

「わたしたちの暮らしとまちではたらく人びと」では、改訂に伴って、生産の仕事では、工場で作られたかまぼこや収穫されたれんこんがどのようにして家まで届くのか、写真やイラストなどを活用して白地図等にまとめることで「地域の人々の生活との密接な関わり」について理解するように設定された。また、販売の学習では、改訂に伴って追加された“売り上げを高める工夫”を“たくさんのお客さんに来てもらうための工夫”と解釈し、子どもたちの発想に近い言葉で学習問題を設定して、調べ学習や話し合い活動を展開している。

3年の単元配列

1 わたしたちの住んでいるところ

1 わたしたちの住んでいる市のように

2 わたしたちの暮らしとまちではたらく人びと

1 工場ではたらく人びとの仕事

2 店ではたらく人びとの仕事

3 安全な暮らしを守る

1 安全な暮らしを守る人びとの仕事

4 市のように暮らしのうつりかわり

1 うつりかわる市と暮らし

「安全な暮らしを守る」では、改訂に伴って、新たに3年生の学習内容に位置づけられた。新版教科書では、火災については消防署への見学や地域の消防団の取り組みを取り上げ、事故については警察署や交番の仕事、交通指導員や交通安全ボランティアの活動のほか、市役所の取り組みについて調べる活動を設定している。学習のまとめでは、「安全な暮らしや命を守るために、私たちにできることは何か」と問いを立てて話し合い、安全マップをつくって発信するなどの活動に発展させることで、問題解決的な学習の展開を示している。

「市のように暮らしのうつりかわり」では、これまで扱ってきた道具と暮らしの移り変わりから、市の様子の変り変わりに内容が大きく変更された。この単元は、時間・空間・相互関係性の三つの見方・考え方を働かせて学習する第3学年の総仕上げとなる単元である。この最終単元において、子どもたちが三つの見方・考え方を働かせて学習することができるように年間の学習の見通しをもって計画をすることがポイントとなる。

—新版教科書を使って期待すること—

一つ目は、社会科を学習する最初の時間に子どもたちと一緒に社会科教科書の旅に出かけることである。「社会科という教科はどんなことを学ぶ教科だと思う？」と子どもたちに問いかけて、子どもたちがあれこれ想像する社会科についての思いや考えを学級みんなで交流する。その後、教科書を開くとそこには「社会科の学習へようこそ！」というページがあり、「ぎもんを見つける⇒調べる⇒話し合う⇒まとめる⇒つたえる」という社会科の学び方が説明されている。その次のページには、「3年生の社会科の学習でたいせつなこと」が書かれており、目次には、3年生の社会科の内容がわかりやすく示され

ている。まずは、ここまでの学習を子どもたちのペースに合わせて丁寧におこなうことがポイントである。

「社会科の教科書には、どんなことが書かれているのかな?」「次のページをのぞいてみたいな」「これからどんなことを学んでいくのかな?」子どもたちの素朴な疑問や興味・関心に寄り添いながら社会科教科書を旅してみよう。きっと、そこには子どもたちそれぞれの気づきがあるだろう。

新版教科書では、子どもたちの素朴な疑問から出発し、ワクワク感やドキドキ感を原動力にして、「もっと知りたい!」ことをとことん追究する子どもたちの姿を描いている。そんな姿に3年生の子どもたちが共感したり、自分の思いを広げたりする自由な発想を大切にしたい。

二つ目は、子どもたち自身が学ぶ意味やよさを実感しながら、自分たちの力で学習を進めていくことである。そこでポイントとなるのは、生活科と社会科の連続性を意識した学習展開である。導入単元「わたしたちの住んでいるところ」では、姫路市の様子を学習する前に、実際に学校のまわりを探検する時間を設定し、子どもたちが身近な地域から体験的に学習をスタートすることで、1・2年生の生活科とのつながりを意識させ、生活科から社会科へ連続性を伴って学習できるように構成されている。学校のまわりを探検する学習では、探検の計画を立てたうえで調査に出かけ、そこで気づいたことを発見カードにまとめ、さらに白地図に整理することを通して、わかりやすい地図の工夫や地図記号の必要性について子どもたち自身が気づき、よさを取り入れていく内容となっている。このように、子どもたち自身が学ぶ意味やよさを実感しながら、自分たちの力で学習を進めていくところは、生活科で培った力を社会科で発揮している姿といえる。



学校や図書館は、地図記号を使うといいだね。地図記号のようなきまりがあれば、だれが見てもどこに何があるかわかる、見やすい地図になるね。

P.19

同じく、連続性を意識した学習という観点から考えると、第3学年の導入単元「わたしたちの住んで



P.2-3

いるところ」と最終の大単元「市のように暮らしのうつりかわり」の連続性を意識して学習することを提案したい。第1大単元では、空間的な広がりや位置に着目し、第4大単元では、時間の経過や時期による違い、変化に着目して学習を展開する。新版教科書では、第4大単元の導入部分で、博物館を見学し、城があった頃の模型を見て、今の市の様子との違いに気づく子どものつばやきが書かれている。第1大単元で地図を活用しながら今の市の様子を学んだ子どもたちは、博物館で昔の模型を見ることで、自ずと今の市の様子と比較し、その違いに気づいている。これは、第1大単元で学んだ知識をまとめ単元で活用し、社会的事象の見方・考え方を働かせ、自分たちの力で学習を進めていく姿を示している。



城があったころのまけいを見ると、今の市のようにちがっているね。

P.126

三つ目は、社会科の各小単元の最初の時間に、教科書の学習展開について自由に意見を出し合う時間を設定し、それをふまえて、子どもたち自身はどんな学習を進めていきたいのか、教師はどのような力を子どもたちに身につけさせたいと考えているのか、子どもたちと教師の対話を通して学習の見通しを立てることである。

「教科書を学習するのではなく、教科書で学習する」ことを第3学年の新版教科書を使って学んでほしい。

自然災害から人々を守る活動

名古屋大学大学院教授
柴田 好章



- 4年について -

新版教科書『小学社会』の第4学年は、六つの単元から構成される。

これまでの3・4年下と比べると大きな変更がある。学習指導要領が3・4年から、学年ごとに独立し、4年生は、自分たちが住んでいる県を中心に学習する。学習指導要領に示される内容は五つであり、基本的に『小学社会』もその順序に従っている。ただし、学習指導要領においては一つの内容項目である「県内の伝統・文化、先人の働き」が、教科書においては二つに分かれている。

それでは、単元ごとに、従来の教科書との違いや、学習指導要領の改訂の趣旨を受けた新版教科書の特徴について見ていきたい。

4年の単元配列

1 わたしたちの県

1 わたしたちの県のように

2 健康な暮らしを守る仕事

1 ごみのしよりと活用

2 暮らしをささえる水

3 自然災害から人々を守る活動

1 自然災害から命を守る

4 暮らしのなかに伝わる願い

1 わたしたちのまちなに残る古い建物

2 わたしたちのまちなに伝わる祭り

5 地いきの発てんにつくした人々

1 原野に水を引く

6 わたしたちの住んでいる県

1 伝統的な工業がさかんな地いき

2 土地の特色を生かした地いき

3 世界とつながる地いき

まず第1大単元「わたしたちの県」は、3・4年下の教科書の最終単元の一部に位置づいていたものが、独立したうえで最初の大単元となった。最初の大単元で県の地理的環境の概要を理解することは、県を単位とする1年間の学習の導入の役割を担う。また、47都道府県について従来は単元外の地図学習のなかに位置づいていたが、学習指導要領で「名称と位置を理解すること」が明記され、教科書でも第1大単元のなかで取り上げるようになった。

第2大単元の「健康な暮らしを守る仕事」では、ごみと水を学習する。選択として、ごみの代わりに下水、水の代わりに電気またはガスが学ぶことができるように、教科書では取り上げられている。

第3大単元の「自然災害から人々を守る活動」は、新たに独立した単元である。なお、従来3・4年下に配置されていた警察と消防は、3年に位置づけられるようになった。

第4大単元の「暮らしのなかに伝わる願い」では、昔から伝わる建物や祭りについて学習する。従来にも増して問題解決学習が色濃くなり、伝統を伝承することの大切さや難しさに気づき、自分たちに何ができるかを考えることが重視されている。

第5大単元の「地いきの発てんにつくした人々」では、開発、教育、文化、産業などに新しく医療が追加された。新版教科書では、開発を中心教材として取り上げ、その他を選択教材として取り上げている。当時の世の中の課題や人々の願いを考えることが重視されている。

第6大単元の「わたしたちの住んでいる県」では、第1単元とともに、従来は一つの単元として、最終単元に位置づけられていたものである。県内の特色のある地域として、地場産業、自然環境に、国際交流が新たに加わり、外国人が多く住む市における多文化共生の取り組みを学習する。

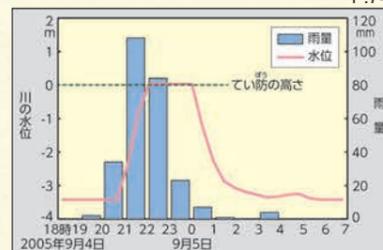
—新版教科書を使って期待すること—

新たな大単元「自然災害から人々を守る活動」では、県内で過去に発生した災害について概観したうえで、代表的な災害に焦点化して、災害が起きたときの対処や、未然に被害を防ぐ（減らす）ための備えについて学習する。

従来は、選択によって火災の代わりに学ぶ位置づけであったものが、今回の学習指導要領の改訂によって独立した。

教科書P.70-71では、県内（教科書で扱っている事例は東京都）で過去から現在に至るまでに起こった様々な自然災害を写真でもって概観できるようになっている。子どもたちが写真や資料をもとに、地震災害、風水害、火山災害などの恐ろしさや被害の大きさを感じることで、対処や備えについて切実感をもって調べ考えようとする意欲を醸成したい。

その後は、一つの具体的な事例にしぼって、より深く学習を展開する。教科書では、東京都杉並区の水害が取り上げられている。教科書P.74-75の普段と増水時の川の写真の比較や、大雨の際の雨量と水位の移り変わりのグラフなどから、実際の災害を理解したうえで、「水害から人々の命を守るために、どのようにふうや努力があるのだろう。」という学習問題をつくり、学習計画を立てる(P.75)。



2005年の集中豪雨では、2000戸以上の家が水につかってしまいました。

都市部では、高層ビルと逃げに川の水量もよまらぬ。でも、このグラフを見ると、水が引くのも早いことがわかるよ。

はるとさんたちは、みんなで学習問題を考え、予想をしたあと、学習の計画を話し合いました。

東京から人々の命を守るために、どのようなふうや努力があるのだろう。

水害は、大きな被害をもたらす。水害がおきる原因について調べたいな。

川の工事を見たことがある。水害を防ぐしっせつをつくらなければならないよ。

調べたいこと

- 水害の原因
- 水害を防ぐしっせつ
- 自然の力
- 堤防のはたらき
- 水害にせよたし活動
- 調べたいこと
- 東京都などの事例
- まとめ方
- イラストと写真

3 自然災害から人々を守る活動

自然災害のおそろしさ わたしたちがくらなから、さまざまな自然災害がおこることがあります。かつて東京都でおこった災害のなかには、特に被害が大きかったものがあります。

自然災害は、東京都だけでなく、こんなにたくさんあるんだね。ほかの県などは、どうなのかな。

災害がおこると、たくさんの人になんたり、多くの家や道路がこわされたりするんだね。ほんとうにおそろしいね。

日本では、台風や地震による災害が多いのかな。どの災害がもっとも被害が大きいのか、調べてみたい。

災害は、昔から何度もくり返りおこっている。自分たちの身にも、いつふりかかってくるか、わからないね。

わたしががらす都道府県で、かつて、どのような自然災害がおこったのか、調べていきましょう。

そして、学習計画にしたがって、水害の原因(P.76-77)や、水害を防ぐ施設(P.78-79)、自然の力(P.80-81)、情報の働き(P.82-83)について、資料をもとに学んでいく。ただし、子どもたちが単に調べ、まとめ、発表すれば、深い学びに至るわけではない。重要なのは、単元をつらぬく問題意識である。『災害による被害を少しでも防ぎたい・減らしたい』というのは人々の〈切実な願い〉である。そのためには、水害の原因についても、水害を防ぐための仕組みや人々の働きも知らなければならない。切実な願いに基づいた問題解決学習が展開されることによって、さらに考えたい問題として、「自然災害から命を守るために、わたしたちには、どのようなことができるのだろうか。」(P.83)が生み出される。

そして、単元の終末では、市や県や関係機関の働きを人々の生活と結びつけながら、災害への対処における公助・共助・自助の大切さを考え(P.84-85)、災害への備えとして自分たちにもできること(P.86-87)を選択・判断できるようにする。

新版教科書では、三つの部分から構成されている。まず、自分たちの身近な事象に出合い学習問題を形成する。次に、学習問題の解決に向けて調べ、人々の願いを実現するために連携しながら工夫や努力をしている社会の仕組みを学ぶ。そして、自分たちにできることをさらに考える。

一連の学習によって、子どもたちが自分ごととして社会に起きていることを捉え、豊かに生きていくための基盤を形成していくことを期待したい。

情報社会に生きるわたしたち

広島大学大学院准教授
永田 忠道



—5年について—

新版教科書『小学社会』の第5学年は、五つの大単元から構成される。大単元「日本の国土と人々の暮らし」から始まり、食料生産、工業生産、情報社会、国土の環境と続く配列は、これまでと同じである。単元の配列はこれまでと変わらないが、新版教科書では、それぞれの大単元のなかの小単元の構成に若干の変化がある。

例えば、第2大単元「わたしたちの食生活を支える食料生産」では、これまで小単元「米作りのさかんな地域」が冒頭にきていたが、新版教科書で

5年の単元配列

- 1 日本の国土と人々の暮らし
 - 1 世界から見た日本
 - 2 日本の地形や気候
 - 3 さまざまな土地の暮らし
- 2 わたしたちの食生活を支える食料生産
 - 1 食生活を支える食料の産地
 - 2 米作りのさかんな地域
 - 3 水産業のさかんな地域
 - 4 これからの食料生産
- 3 工業生産とわたしたちの暮らし
 - 1 暮らしや産業を支える工業生産
 - 2 自動車工業のさかんな地域
 - 3 日本の貿易とこれからの工業生産
- 4 情報社会に生きるわたしたち
 - 1 情報をつくり、伝える
 - 2 情報を生かして発展する産業
- 5 国土の環境を守る
 - 1 環境とわたしたちの暮らし
 - 2 森林とわたしたちの暮らし
 - 3 自然災害から人々を守る

は、小単元「食生活を支える食料の産地」から始まる構成となった。同じく、第3大単元「工業生産とわたしたちの暮らし」においても、小単元「自動車工業のさかんな地域」の前に、新たな小単元「暮らしや産業を支える工業生産」を配置している。

これは、具体的な個別の産業を詳しく考察していく前に、食料生産と工業生産ともに、それぞれの産業の概要や全体像を俯瞰することで、これまで以上に広く深い学びの実現を可能にする新たな手だてとなっている。

食料生産の場合には、さまざまな食料の産地マップづくりを通して、学習問題「わたしたちが生きるために必要な食料は、どこで、だれがつくっているのだろう。」をつくり、国内の食料生産の全体像をつかませる。そのうえで、米作りや水産業もしくは、選択として取り上げることも可能な畜産業やくだもの作り、野菜作りを具体的に取り上げることによって、食料生産の最後の小単元「これからの食料生産」へと問題解決的な学習や探究の流れを活発化させる学習展開が可能になる。

5年冒頭の大単元「日本の国土と人々の暮らし」では、新たに小単元「日本の地形や気候」を設けることで、小単元「世界から見た日本」と「さまざまな土地の暮らし」との学習の意図と展開を円滑に進めやすくなっている。

また、学年最後の単元「国土の環境を守る」では、小単元の構成はこれまでと変わらないが、小単元「環境とわたしたちの暮らし」、小単元「森林とわたしたちの暮らし」から、最終の小単元「自然災害から人々を守る」への関連づけが図りやすい紙面構成への工夫が施されている。

第4大単元「情報社会に生きるわたしたち」は、これまで小単元「情報をつくり、伝える」と小単元「情報化社会を生きる」で構成されていた。このう

ち小単元「情報をつくり、伝える」は、引き続き、新聞社を中心的な題材として、これからは情報社会の問題点についても、本小単元のなかで取り扱う構成となった。もう一つの小単元「情報化社会を生きる」は、今回、小単元「情報を生かして発展する産業」へと姿を変えている。

—新版教科書を使って期待すること—

新たな小単元「情報を生かして発展する産業」は、私たちの日常生活だけでなく、さまざまな産業においてもいろいろな情報が多様に活用されていることを考えていく単元である。

私たちは毎日の生活のなかで天気予報をもとにして、服装や持ち物の選択や判断をおこなっているが、コンビニエンスストアやスーパーマーケットなどでも傘などの商品の売り上げや仕入れの仕方に、どうやら気象情報に関係しているらしいことを、教科書P.208-209の資料①～④から、子どもたちに気づかせたい。

そのうえで、教科書P.211のような話し合いを通して、天気予報などの「気象情報は、産業でどのように利用されているのだろう。」といった学習問題づくりへとつなげていきたい。



P.212

例えば、アイスクリームをつくる会社では、多くの人々が買い求めようとする気温になる日かいつごろかを予測して、商品をどのくらい生産して、どのくらい出荷すればよいかを、教科書P.212の資料②などから考えられるようにしている。その際には気温などの気象情報とともに、全国各地の店の商品の在庫状況や、人々が買い求めたいと思うような商品はどのよ



P.208



P.208-209

うな商品かを予測したりすることも重要である。

アイスクリームと異なり、消費期限が短い商品が多いとうふの場合は、気象情報の活用には何か違いがあるのかどうかを考える教科書P.214-215も学習展開上の仕掛けの一つにもなっている。アイスクリームととうふから同じ食品産業であっても、その製品の特性に応じて、情報の生かし方には違いがあることを考察することを通して、では他の産業はどうなのだろうか、また情報を送り出す側にも産業ごとに何か特別な手だてがあるのだろうか、といった深い学びへの誘いが施されている。

本小単元の最後では、学習問題についての最終的な話し合いを通して多角的に考えながら、子どもたち各自が「わたしたち」と「産業の立場」から情報をどのように生かしていくべきか、自分の考えをまとめていこうとする姿を紙面化している。



P.217

教科書を使って、第5学年で特に期待することは、紙面に配置された効果的なさまざまな資料をもとに、対話的な話し合い活動から、子どもたちが主体的に学習問題をつくり、その解決に向けた多角的な考察を通じた深い学びの結果として、各自が選択・判断した自分の考えをまとめていけるような学習展開である。

教科書で小学校社会科の集大成を

愛知教育大学教授
土屋 武志



—6年について—

新版教科書『小学社会』の第6学年は、下に示したような単元配列になる。これまでと大きく違う点は、歴史学習「日本のあゆみ」の前に「わが国の政治のはたらき」という憲法や政治に関する学習があり、それをもとに歴史を学び、そのうえで「世界のなかの日本とわたしたち」を学ぶ構成となった点である。学習指導要領の改訂に則して、これまでとは違った斬新な「サンドウィッチ」構成となった。

さて、日本国民の多くは、自身が戦火にさらされないことを前提としてくらしている。それは、日本

国憲法が「平和憲法」として社会に定着しているからである。しかし、それは決して当たり前ではない。歴史を学ぶと、これまでの人類の歴史のなかで、平和にくらせることが貴重なことであることに気づくことだろう。教科書には、戦乱をへて社会が変わってきたことが描かれている。だからといって、戦争で社会を変える市民を育てることが、社会科の目的ではない。だから、憲法が平和日本の基本であり、それにもとづいて政治がおこなわれているという今の社会の仕組みを学ぶことは、歴史学習の基礎でもある。子どもたちは、現在の法律や政治の仕組みを理解したうえで、そうではなかった過去を、今と比較しながら、自ら疑問をもって学ぶことになるだろう。そのなかでの気づきや発見が、学年の終末に、これからの国際社会での日本の役割と自分自身の未来を考える学習へとつながっていく。

ところで、「憲法」や「政治」といっても、子どもたちがそれを身近に感じるためには、それに関わる仕事をしている人たちとの出会いが大切である。教科書では、市役所や裁判所などで働く人が登場する。災害をなくす努力など、子どもたちにとって大切だと感じられる内容から、人権や行政を考えることができるように、内容が工夫されている。子どもたちにとって大人への道しるべとなる構成である。

—新版教科書を使って期待すること—

○今までの社会科学習で身につけた力を使おう

新版教科書の表紙見返しには、「見学しよう」「調べよう」「話し合おう」「資料を読み取ろう」「やってみよう」のキャプションとともに子どもたちの学習場面が紹介されている。また、第1大単元「わが国の政治のはたらき」には、3年生から5年生までの学習を子どもたちが振り返る場面がある。6年生の学習は、5年生までの社会科学習の延長線上にあ

る。子どもたちが疑問をもって対話して学びを深める学習のきっかけやヒントになる情報が教科書にはある。それに気づかせる使い方を特に期待している。つまり、覚えさせるための教科書ではなく、子どもたちが疑問を見つけ、教科書の資料を使って、考えをまとめ、自分なりのノートをつくって友だちと対話する。そのような学習活動のために教科書を使うチャンスを子どもたちに与えたい。

○歴史では今との違いや共通点に気づかせる

6年生で大きなウエイトを占める歴史学習。新版教科書の歴史学習のスタートは、大阪府堺市の上空からの航空写真である。現在のビル群の中に前方後円墳が散在している。子どもたちが歴史博物館を訪ねて質問している様子もある。また、各時代に、その時代を象徴する人々のくらしを描いたイラスト（想像図）がふんだんに載せられている。イラストは、昔の様子だけでなく、子どもたちが対話しながら学習問題をつくり、それを調べ、自分たちの考えをまとめていく場面も描かれている。

対話学習は、答えを覚える学習でなく、答えを見つけ出したり、つくり出したりする学習の基本型だが、歴史学習の場合、今と違う昔の常識に気づかせたいものである。その頃の人たちは、なぜ（今と違って）そのようにした（考えた）のか？それを追究するなかで、今と同じではないか？という共通点にも気づく子どもがいるかもしれない。いろいろな見方で迫る学習が期待される。

○教科書から気づく「矛盾」

教科書から矛盾に気づく子どもたちがいる。例えば、明治時代に描かれた帝国議会の絵がある。教科書P.181には、対話する男女4人の子どもたちが

描かれているが、比べてみて大きな違いに気づく。明治の絵に描かれているのはすべて男性である。

江戸時代、「蘭学のはじまり」には、医学発展の功労者である杉田玄白と前野良沢の肖像画が生没年つきで載せられている。いずれも江戸時代に描かれた肖像画である。杉田玄白の絵に疑問をもつ子がいる。前野良沢と入れ替わった誤植ではないか？と。たしかに良沢より10歳若いはずの玄白が良沢より高齢に見える。二つの絵は描かれた時期が異なっているのだから、見た目の逆転が起きているのだが、それへの気づきである。教科書は、玄白らの解剖場面のイラスト（想像図）も載せている。良沢48歳、玄白38歳で描かれている。この想像図を見た子どもたちの、図の中のだれが玄白なのかと脱線？する姿も楽しみである。

①人体かいぼうを指導する杉田玄白と前野良沢たち（想像図） かいぼうをしながら玄白や良沢の次に説明を受けるのは、当時、西洋や中国人からも尊敬された人々の一人でした。かれらのちつげんや知識が、医学の発展に役立ちました。

②当時使われていた医学書のかいぼう図(左)と「解体新書」のかいぼう図(右)

みおさんたちは、蘭学について調べてみることにしました。

18世紀のなかばになると、オランダ語の書物を通して、ヨーロッパの学問を研究する蘭学が盛んになりました。

小浜藩(福井県)の医者であった杉田玄白と中津藩(大分県)の医者であった前野良沢は、オランダ語で書かれた人体かいぼう書を手に入れました。その後、玄白たちは、実際にかいぼうを見学し、その本の正確さにおどろきました。自分たちの無知をさとった玄白たちは、すぐにこの本のほん訳に取り組みはじめました。玄白たちは、3年半ほど苦労を重ねてほん訳を完成させ、『解体新書』として出版しました。

『解体新書』の完成をきっかけに、長崎や江戸で蘭学を学ぶ人が増えました。さらに、オランダ語の入門書や辞書もつくられ、医学・天文学・地理学などの新しい知識や技術が広まりました。

蘭学を学んだ人の中には、日本の近代科学の礎を築いた人も多くいます。佐原(千葉県)の商人であった伊能忠敬は、50才を過ぎてから西洋の天文学や測量術を学びました。そして、幕府の命令を受けて全国を測量して歩き、正確な日本地図をつくらうとしました。

P.156

6年の単元配列

- わが国の政治のはたらき
 - 憲法と政治のしくみ
 - わたしたちの願いと政治のはたらき
- 日本のあゆみ
 - 大昔のくらしとくにの統一
 - 天皇を中心とした政治
 - 貴族が生み出した新しい文化
 - 武士による政治のはじまり
 - 今に伝わる室町の文化と人々のくらし
 - 戦国の世の統一
 - 武士による政治の安定
 - 江戸の社会と文化・学問
 - 明治の新しい国づくり
 - 国力の充実をめざす日本と国際社会
 - アジア・太平洋に広がる戦争
 - 新しい日本へのあゆみ
- 世界のなかの日本とわたしたち
 - つながりの深い国々のくらし
 - 国際連合と日本の役割

れんさんたちは、これまで学んできたことについて、①から③の資料を見ながら、みんなで話し合いました。

日本国憲法	日本国憲法
1946年	1889年
天皇の国事	天皇の国事
議院の権限	議院の権限
選挙	選挙
裁判	裁判
地方自治	地方自治
国籍	国籍
教育	教育
労働	労働
社会保障	社会保障
国際関係	国際関係

①日本国憲法と日本国憲法の比較

れんさんたちは、明治維新のあと、日本が欧米諸国と肩を並べるよう努力したことを知りましたが、このあと、さらにはどのような国づくりが進められたのか気になり、調べることになりました。

P.180-181

『小学社会』教師用指導書、デジタル教科書・教材のご案内

教師用指導書の構成

普段の授業や研究授業などで役立つ情報をまとめています。

総論

『小学社会』編集の基本方針とともに、社会科で重要な能力育成や、新しい教育課題についての指導について、具体例をまじえて解説。

朱書編

教科書紙面の縮刷を中央に配置し、授業準備がスムーズにできる、授業で必ず使う精選した情報を掲載。(各学年1冊)

研究編

●資料活用のポイント

中心資料から読み取らせたい事実とそこから考えさせたいことを解説。

研究編

教材研究に役立つ論考とともに、年間指導計画例や学習指導案例を詳しく掲載。(各学年1冊)

デジタルデータ集

評価テスト例やワークシート、イラストカット集、『小学社会』PDFデータと、新たに教科書に掲載図版データ収録。(各学年1枚)

●子どもの学習状況を見取るためのチェックポイント

本時のねらいに即した観点を選び、授業に呼応した評価規準の具体例と、C基準の子どもへの指導の手だてを解説。

●学習活動のアイデア

子どもがつまづきやすいポイントをふまえた指導の手だてや参考となる学習活動について解説。

●展開例 子どもの学習活動や発問・発言例を示し、子どもの意識の深まりに沿った学習展開を例示。また、指導するうえで留意すべき点をあわせて例示。



朱書編

●子どもの活動と内容

子どもの意識の深まりに沿った学習展開や、指導するうえで留意すべき点を例示。

●内容の解説

教科書掲載図版の解説を掲載。ほかにも、授業で使える豆知識など、授業ですぐに使える情報を掲載。

●子どもの学習状況を見取るためのチェックポイント

授業に呼応した評価規準の具体例を、評価を見取る分節に記載し、さらにC基準の子どもへの指導の手だてを解説。

●板書例

子どもの思考の整理につながるような、1単位時間の流れがわかる板書例を例示。



拡大教科書のご案内

日本文教出版では、すべての小学校・中学校教科書で、拡大教科書を発行しています。拡大教科書は通常の教科書の文字を拡大するとともに、編集意図を損なわないように写真など、図版の配置も再レイアウトしたものです。

デジタル教科書・教材

1 学習者用デジタル教科書

日本文教出版では、「学校教育法等の一部を改正する法律」の公布により制度化された「学習者用デジタル教科書」を発売します。

こちらは、学校教育法において規定された基準において、必要に応じて紙の教科書に代えて利用することができます。



※表示ソフトウェアは「まなビュー」を採用しています。
※本ソフトウェアは開発中のため、本記事の内容及び仕様は予告なく変更する場合があります。
※動作環境は、弊社 Web サイトで順次お知らせします。

主な機能

- 拡大、リフロー（画面に合わせた配置変換）
- 音声読み上げ
- 色の反転、配色設定
- 総ルビ表示
- 書き込み、保存

※紙の教科書と同一内容であり、教材コンテンツは収録しておりません。

特別支援に効果的

特別な配慮を必要とする児童にご活用いただける機能を搭載しています。

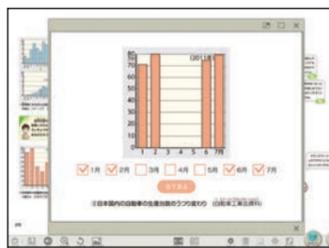
商品情報

- 「学習者用デジタル教科書」3年～6年
- 発売：2020年4月（予定）
- 価格：未定
- 動作環境：弊社 Web サイトにて順次お知らせいたします。

2 指導者用／学習者用デジタル教材

2020年度版『小学社会』に準拠したデジタル教材です。電子黒板などの大型提示機器や、個人端末（タブレットPC）を利用して、主体的・対話的で深い学びをおこなうことができます。

①凡例別表示



②単独拡大



③アニメーション



商品情報

- 「指導者用デジタル教材」5年、6年
- 「学習者用デジタル教材」5年、6年
- 発売：2020年4月（予定）
- 価格：未定
- 動作環境：弊社 Web サイトにて順次お知らせいたします。

※表示ソフトウェアは「まなビュー」を採用しています。
※本ソフトウェアは開発中のため、本記事の内容及び仕様は予告なく変更する場合があります。
※動作環境は、弊社 Web サイトにて順次お知らせします。

3 デジタルマーク対応コンテンツ

右のデジタルマークのついた教材には、関連するデジタルコンテンツをご用意しています。日本文教出版 Web サイト上に設置する無料のデジタルコンテンツ（映像・画像など）を授業でご活用いただくことで、子どもたちの興味・関心を引き出し、さらに学習を深めることができます。

デジタル